2024 私の劇評

あなたにとって演劇とは、そして旭川市民劇場とは？一年を通して見えてきたこと、感じたことを投稿していただきました。

演劇で新しい発見

C36 じゅん 植田

毎年6本の演劇を観ていて、私の知らなかったことが必ず出てくるので驚きと感動です。

7月『帰還不能点』、ポイント・オブ・ノーリターンという航空用語の日本語訳で離陸後の飛行機が空港へ戻れるだけの燃料がなくなる限界点だそうです。私の知らなかったことを教えてくれた「総力戦研究所」なるもの、この時の戦争は一部の軍人トップが悪いと思っていた私には、誰が本当に悪かったのかと、戦争を知らない私は最終的には日本国民の大人の責任ではないかと思った。感動のお芝居だった。

4月、大衆演劇の醍醐味を観たと思えばよいのか、私も俳優さんにエールを送る意味で「うちわ」をふったが最後は歌と話で終わった。サークルの友達に聞くと大衆演劇はこんなものだそうだ。

6月は、現在の日本が人手不足でブラジルへ移民した方の3世を国の政策で呼び戻した結果のごたごた、ここで今の日本人が忘れている「思いやり・両親への感謝」とかブラジル3世に思い出させられた。最後のサンバはもう少し工夫が欲しかった。

10月、朗読。篠田三郎さんのさわやかな声、樫山文枝さんのやさしい声に癒された気がしたがやはり民藝さんにはお芝居で見せてもらいたい。

2月、田中角栄が総理になるまでの話がたんたんと。舞台は一度も変わることなく最後は歌で終わるとは。

12月、原子力発電所で出るごみの処分場の現実の問題を取り上げた話の割には、反対・賛成に分かれ家族・友達までが反目しあう分かり切った内容。ラストもなんだか中途半端でしたね。何か発見があるかと思ったが何もなし。

人生100年時代と言われている昨今、これからも旭川市民劇場が続くことを願っている私です。それには1000名の会員が必要です。私もサークルの仲間、知り合いなどにも声かけをとパンフレットを渡しています。

今年は社会派作品だ！

E38 ふるーつぱすけっと 大谷淳子

タイトルは、年間ラインナップをみての私の思い。まずは、6例会、すべての作品を無事に観られたことに感謝。自分の体力も、社会情勢（コロナ・災害も）にも、ありがたい気持ち。

2月『宵闇、街に登る』タイトルがひねられている。何作かの連作劇の中の一作。田中角栄の物語というだけで、観る側にも「記憶」があり、映像・書籍も多々ありすぎ。周辺を含めて、史実の政治家を舞台化。その意気込み、作風。短時間にまとめあげられており、不安感と興味もまぜこぜに。今現在とも似ているようでもあり。「政治」はいつも「オモテ」と「ウラ」なのかー。

4月『あぶくの流儀』正直なところ、芝居の本編よりも、幕のあと、歌謡ショーの大衆演劇にやられるか、やりすぎかー。好み・評価のわかれるところ。

6月『いちばん小さな町』モデルになる実在のマチがあり。外国人労働力がないと成り立たない現実があり。『共生』は、日本人と日本人との間でも問われる。しかし、こと、ブラジルという国との日本の国策や法律の歴史の深いこと。驚くばかり。これこそ、学生の時に皆が学ぶべきことだろう。なぜに教えられていないのかー。

7月『帰還不能点』この聞き慣れない言葉。劇団の志ある題材・内容・脚本・セリフ・演技。折しもTVドラマ「虎に翼」で総力戦研究所が、ジャスト・タイミングで放送。胸に来た。戦争反対！！

10月『文学のタベ』朗読。名優2人による静かな時間。公会堂とはいえ、みんなの耳にしっかと届いたかどうか。感動により感想がわかれるか。

12月『ガラクタ』やはりタイトルにこだわる。原発の最終処分場の問題を「核のゴミ」＝「ガラクタ」の

表現は短絡ではないか。印象づけるタイトルと派手な演技。下品と思われるセリフがあり私は好まない。日常的な、北海道の地で、実際に起きている大問題。自分ごととして、深く考えねば。（道内で広く、説明会開催中。とってもよいです）

初めて、例会として、旭川で上演した劇団もあり、新しいパワー・魅力を直に味わえる機会は、ありがたい。新しい会員パワーを補充せねば！

模擬内閣リハーサル、大喜利の刻

A1 魔術師 西裕美子（ペンネーム）

今、居酒屋を舞台とし昭和16（一九四一）年の夏、総力戦研究所で行われた模擬内閣、日本の戦後を決定づけた議論を題材にした劇の練習が始まる。書記官長役の岡田は即ち脚本家、演出家の化身である。登場人物は男性九人、女性一人。選りすぐりの名優たち。

練習は大詰めの刻。誰がどの大臣役をも演じきる力をつけ、紅一点は残酷な戦争の被害者を悲しくも毅然とした佇まいで表現する美しい女優である。

―軍部は長引く日中戦を乗り切らんと南部仏印進駐も視野に勝機を窺う。

近衛首相直属で一九四〇年九月開設の総力戦研は翌年四月、第一期生を集め、大臣役を割り当て対米戦の賛否を議論させた。

―劇中劇なら『ハムレット』。旅芸人一座に王子の疑念を演じさせるものが知られるが、『帰還不能点』のごっこ遊びは一度ならず何回も演じる役が交代する。脚本家の企みは、日本の進路を決定した決断を、どの大臣が考えても同じ結果を招いたかも含め観客と共に考えること。苦悩や反省を糧として、現在世界で起きている大変革につき、日本の国と日本人の未来について真摯に向き合い生きてもらうことである。

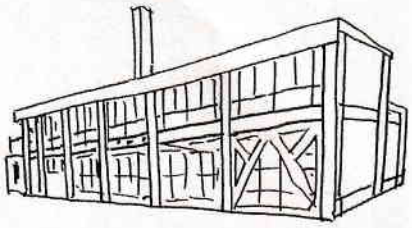
芝居の醍醐味は演じられ観せられていることの編集やカットなく直に伝わることである。

映像なら、もし一瞬、数秒でも切られた物ならば作者の意図が捻じ曲げられる。芝居はその場で観たまま聞いたまま。

戦後に多大な苦しみと傷を負ったのは大臣たちも日銀の行員も道子も皆、そうだった。

どの国で起きた戦争も夥しい犠牲者を出してきた。「では何故、戦争が起きるのか」との疑問を長年抱えていた折も折『戦争屋』の存在を知らされ腑に落ちた。世界の深層で巧妙に網を張り巡らせ繋がり利己主義で金儲けのために人命無視のモノタチの存在だ。

次の世代の道子には幸せな人生を約束するため、本番に向け九人の男性俳優たち、脚本を超える熱弁をふるい演じてくれたまえ。

学ぶ必要あり（大原槇子）

二〇二五年一月二三日（木）記